

壊
された
手鏡
の
残像

瀧永好和

目次

第一章	二冊の本	5
第二章	黒魔術	49
第三章	別離の迷い	93
第四章	親不知の哀憐	123
第五章	推理の影絵	169
第六章	足尾銅山の因果	199
第七章	祈祷師の正体	221
終章	二人の幸恵	277

第一章 二冊の本



香田京子は母親と二人、静岡市内で暮らし市立図書館に勤務、母、節子は庁舎建設課に所属、今年三十年表彰を受ける。実直で寡黙を通す元警察官の夫、保憲を、十五年前交通事故で亡くし、今は一人娘を見守る日々。

時代背景の相違か、独身を謳歌する娘が周辺群れをなす。我娘の嫁ぐ寂しさが身に堪え、人並みの感情と達観した諦めや移ろいを、義母の形見に寄り添う押花へそつと映す。

京子にとつて母親譲りの手料理は大得意の選択科目、交代で夕食を賄う。趣味と内面衛生の鍛錬を兼、必読を課し、潮流に抗う豪傑達の列伝、憧れる同性が認めた散文やエッセイ、古へと連れ従い興味は大、今夜も文豪の一人に誘われ無私の境地に埋没、朝方に衣を変えても旅は止まない。

蘊蓄を無駄に吐き出す知識人を横目、撫で斬る悪女も二十九を数え、心模様を文字で染め、豊潤な果実へと成長させつつある。

また、書物から学ぶ限界を悟る、まともな素顔も併せ持つ。実体験なし何人も人生を乗り切れぬが、日常に縛られ無為に排泄される孤独な時間群、越えられない現実、蓄積する遣り切れなさ、集約された諦めの意識が、バラ模様のセカンドバッグに常備品、詰め込まれる。

四月下旬、大学時代から繋がる四人は憂さ晴らしを兼ね、京都周辺の探索を計画。冥想画面を繋ぎ、幹事の説明に耳を寄せた。来週に迫る。皆、忙しい口振りで相槌、紅が濃い口元は情気に染まるも、意味なき明日へ微かな希望を託し、反逆の狼煙を上手に包み隠す。京都市内に在る民事主体の弁護士事務所勤務、法曹界デビューに向け孵化を待つ卵が嵐山界限に住む。

柿田めぐみは古都の道案内を司る終身幹事。最近購入の大型車で皆を迎える。恋人が京都地検に勤務、来春独身女が確実一人この世から姿を消す。